

オーストラリアのスローライフ

The Australian National University, Research School of Astronomy and Astrophysics

オーストラリア国立大学（オーストラリア、キャンベラ）

<https://rsaa.anu.edu.au/>

2022年の4月より、私はオーストラリア国立大学（The Australian National University: ANU）の天文学専攻にて研究員として勤務しています。本稿では、1. オーストラリアでの研究環境、2. キャンベラでの生活、3. 着任への道のり、そして最後に、海外生活で自分なりにやってよかったことを紹介します。

多様性を重んじる研究環境

私は、オーストラリア政府が支援するASTRO3Dプロジェクト^{*1}（重点分野を支援するための大型科研費のようなもの）のポスドクとして採用されました。ASTRO3Dは、多様性と包摂性を重視しており、2017年から2022年にかけて、ポスドクや学生の女性比率を50%以上にするという目標を達成しました[1, 2]。日本の研究環境と比較して最初に感じた大きな違いは、ANUには性別だけではなく、多様な国籍、人種、文化背景を持つ学生、ポスドクがいることでした（図1）。天文学専攻では私一人が日本人でしたが（最近ポスドクとして東北大から大金原さんがANUに加わりました）、多くの人が同じように母国を離れオーストラリアで研究しており、容易に仲間に入っていくことができました。多様な文化を持つ仲間との交流や研究活動を通じて、異なる視点や考え方に触れることができていることは海外でポスドクをする一番のメリットだと思います。

津久井崇史（Postdoctoral Fellow）



図1 ANU（天文学専攻）のポスドク仲間：左から時計回りに、筆者、Hiep（ベトナム）、Antoine（フランス）、Aditi（インド）、Jackie（香港）、Erwin（中国）

ます。

ANUでの研究生生活は、朝9時ごろに職場に到着し、10時半から30分間のコーヒータイムを楽しむことから始まります。この時間は、研究について話すこともありますが、主に生活や趣味、休日にしたことなど、研究とは直接関係ないことが話題の中心です。このように一見のんびりとした雰囲気の中で日々が始まりますが、17頃にはほとんどの人が帰宅するため、終業時刻を目指して効率よく集中して作業します。夜遅くまで大学に残って疲労困憊のまま仕事したり、そのようなストレスから何か重要なことを先延ばしにしたりすることが多かった学生時代と比べるとANUで

^{*1} The ARC Centre of Excellence for All Sky Astrophysics in 3 Dimensions (<https://astro3d.org.au/>)

の働き方はより健康的で効率的になりました。

ANUの天文学専攻では「職場環境が誰にとっても公平なものであるか」や「様々な価値観や文化を持つ誰もが受け入れられているか」について専攻全体で定期的に話し合うミーティングがあり、全スタッフ、学生が参加します。こういったこともあり、問題を抱えたときに、こんなことがあってこんな思いをしたということが話しやすい雰囲気が醸成されています。また、そのような意見交換は職場をよりよくするための重要な意見として評価されていると感じます。日本の文化では、職場で起きたことに対する嫌だと思った素直な感情、不平不満を漏らすことが時として否定的に捉えられることがあります。この開かれた文化によって、ワークライフバランスが保たれ、居心地のよい職場環境が実現しており、異なる文化背景を持つ人々が共に働き、学ぶための基盤となっているように感じています。

ANUの天文学専攻には宇宙加速膨張の発見によりノーベル物理学賞を受賞したブライアンシュミット教授や銀河円盤、ダークマターの研究で有名なケンフリーマン教授などがいます。彼らリビングレジェンドとの対話や議論はいかに良い研究をするかの参考になります。またANUでは毎週外部の研究者が訪れ、セミナー発表があります。発表の後には発表者と近くのレストランに昼食に行き交流できる機会があります。また訪問した研究者の時間を事前に確保してもらい、研究の議論やキャリアの相談をすることができます。このような交流の機会是人脈や共同研究を広げることにとても役立っています。

キャンベラでの生活

ANUはオーストラリアの首都キャンベラにあります。キャンベラは首都であると同時に、ブッシュキャピタルとも呼ばれ、豊かな自然に溢れています。ANUの本キャンパスは街の中心にありますが、天文専攻は人里離れた山の上にあります。



図2上 シェアハウスの庭で撮ったポッサム。リンゴの木の上でリンゴを食べている。

図2下 大学構内で撮ったカンガルー。うじゃうじゃいる！

す。そのため通勤途中や大学構内で身近に野生動物（マグパイ、カンガルー、ポッサム、ウォンバット、エキドナ、コカトゥー）を見ることができます（図2）。鳥の鳴き声（鳴き声は美しい見た目と違って凶暴！）で起床し、通勤途中に見かける他の大陸では見ることのできない独特な形態の動物が与えてくれるセンスオブワンダーは日々研究の刺激になっていると感じます。また、私はオーストラリアで初めてシェアハウスに住み、3人のハウスメイトとかけがえのない友達になりました（図3）。土曜日にはみんなでカフェに行



図3 ハウスメイト、左からSharaf（インド：コンピュータ科学の修士学生）、Paul（ニュージーランド：シェフ）、Clint（オーストラリア：大家、元天文学者）、筆者。

きコーヒーを飲み、夕方には夕食を作ります。プロのシェフであるハウスメイトからは、様々な多国籍料理の作り方を学んでいます。

着任への道のり

私は博士課程3年（2021年）の8月頃に海外でのポスドクを考え始め、AAS Job registerから自分に合いそうなポジションを探し始めました。University College Londonの河田大介さんに海外就職活動について相談し、アプリケーションの書き方など、ポスドクを雇用する目線での具体的なアドバイスをもらいました。特に決め手となったのが、応募する前には上司となる研究者と個人的な連絡をとり、やる気を見せるとよいということでした。

実際に、ある大学の公募に応募する際、事前に連絡をとりZoomを通じて雇用主となる研究者にお話する機会をいただき、個人的なつながりを作ることができました（現在でも継続して議論や共同研究をする仲間になりました）。最終的に、その公募では採用してもらえませんでした。別の公募を紹介してもらい、そこから現在のポジションのオファーをもらうことができました。コロナ禍の中、対面での国際学会が開催されず、研

究発表を通じた新たな繋がりを作る機会が限られていたため、Zoomを通じた直接の対話がこのオファーをもたらえた重要な要因となったと感じています。

海外で働く・生活する時やってよかったことなど

同じ理解や見方ができているか確認すること、必要なものや、他人に求める行動をしっかりと共有すること、そして自分の感情や考えを伝えることは異なる文化背景を持つ人と働くうえで特に重要だと感じました。

例えば、私の雇用は特定の研究プロジェクトの推進を目的としていましたが、自分のキャリアを考えた時、博士課程の研究の延長線上にある優先したい研究がいくつかありました。しかし、着任当初、それらを進めることが可能か、またそうすることが上司の期待に沿っているのかが不明瞭でした。そこで、優先したい研究と行う順番を具体的なタイムラインと共に示したところ、快く承認してもらうことができました。推進する研究を明確にし、合意を得たことで、自信をもって行うことができ、その成果を正しく評価してもらえることができました。もし、曖昧な状態で複数の研究を漫然と進めていたら、私自身が不安に感じるだけでなく、上司からの正しいサポートや評価を得ることができなかったと思います。

また上司にやって欲しいことは躊躇せずをお願いしました。例えば、よりよい研究者になるために改善点やアドバイスがあれば指摘してほしいとお願いしたり、キャリアに関しての助言を求めたりしました。すると、とても親身になって助言やフィードバックを親切にしてくれたり、キャリアに役立つようにと研究賞に推薦してもらえたりと、自分の研究キャリア上とても頼りになるメンターを得ることができました。

海外で生活し始めた当初は人とのコミュニケーションの質が悪く、それは自分の英語能力の欠如

が原因にあると考えていました，しかし，今では自分の姿勢に大きな問題があったと考えています．まず，人の話を聞くということがコミュニケーションの大前提にもかかわらず，わからなかった時に，雰囲気壊さないためにわかったふりをしていたことです．

相手の言ったことがわからない会話には意味がなく，わかったふりをするということは相手に失礼であることに加えて，様々な機会を失い続けていたと思います．

話すことに関しても同様で，最初は自分が話している英語が文法的に正しいかに気を取られていたと思います．しかし，そのような問題は瑣末であると捉え，相手に言いたいことが正しく伝わっているかに重点を置くことを心がけるようにしました [3]．言葉以外にも，ホワイトボードに図を書くことが便利ですし，身振りや手振りなども使えます．また文化の違いや英語能力の違いなどにより，前提となる背景や，なぜそう思うかを丁寧に説明しないと説明不足になってしまうことが多くありました．そのような場合にはシンプルな英

語を心がけるとともに情報量を増やして伝えることを意識しました．自分の言いたいことを正しく伝える努力をすることで英語を話す能力も徐々によくなってきていると感じます．

最後にオーストラリアに来て最もありがたみに気づかされるのは，友人の存在です．友人がいて孤独でなければ人間はどこにいても幸せに生活できるのではないかと思います．海外生活するうえで，また仕事外の生活の質を高めるうえで，職場と関係のない or 日本人の友達は何物にも代え難いと思います．オーストラリアに来て最初の2年間，私の交友関係はハウスメイトと天文学関連の人々に限られていました．最近ではようやく，キャンベラの卓球クラブやボードゲームクラブなどを通じて，大学外の友達や日本人の友達もできるようになりました．次のポジションに移るときには，新しい場所で積極的に人との繋がりを求めていきたいと考えています．

- [1] Kewley, L. J., 2021, Nat. Astron., 5, 615
- [2] Kewley L. J., et al., 2023, Nat. Astron., 7, 1525
- [3] <https://ideas.ted.com/when-speaking-a-new-language-what-matters-most-is-your-attitude-not-your-accuracy/> (2024. 7. 10)